

“ 古風な語 ” と “ 新しい語 ” の使用と動態に関する 研究 : 「 複合保存 」 と 「 旧物新語 」

著者	尾崎 喜光
雑誌名	清心語文
号	20
ページ	37-58
発行年	2018-11
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000401/

“古風な語”と“新しい語”の使用と動態に関する研究 —「複合保存」と「旧物新語」—

尾 崎 喜 光

1. 事物の変化と言葉の変化

他者に言葉で何かを伝えようとする場合、その中核となるのは何と言っても単語であろう。伝えたい事物や概念が私たちの心の中にあったとして、もしそれを的確に表わす単語がなかったら、それを他者に伝えることは難しい。もっとも、多少なりとも複雑な事柄を伝えようとする場合は、一つの単語で伝え切ことは困難であるため複数の単語を連ねて文の形で表現することになることを考えると、これらの単語間の関係を保証する仕組み（文法）も実際にはまた重要となる。

私たちの身の回りに存在する事象を単語を使って伝えようとするわけであるから、私たちの社会に何か新しい事物や概念が登場したとき、あるいは事物や概念自体は以前からあってもそれらが新たに私たちの日常生活にまで進出するようになったときは、それらを的確に表わす言葉が必要となり、私たちの社会に新語が登場する。

身近なところでは、日本の最高気温が35度以上になる日が日常的になると、それを表わす「猛暑日」という語が作られ使われるようになった。同様に、夜間の最低気温が25度を下回らない日が日常的になるとそれを表わす「熱帯夜」という語が作られ使われるようになった。かつてないほどの猛暑の今年の夏は、夜間の最低気温が27度を下回らない日を表わす「スーパー熱帯夜」という言葉も作られ、一時期マスコミで使われた。また、2020年東京五輪・パラリンピックのマスコットが決まると、それらを表わす「ミライトワ（未来+永遠）」「ソメイティ（ソメイヨシノ+so mighty）」という名前が日本語に加わった。

こうした事実は、私たちの身の回りにかつてあったものが技術革新等により無くなると、それを言葉で表わす必要性も当然なるわけであるから、その言葉も徐々に使われなくなり、やがては誰もが使わなくなる時代が訪れるということをも意味する。

しかしながら、ある事象を表わす語が単純語ではなく複合語であり、それを元の要素に分解して理解することなどまずなく、一語としての意識が堅固な場合は、その構成要素が表わす事物が存在しなくなっても、その語をそのまま使い続けるということがある。

たとえば、下駄が一足も入っておらず、入っているのは靴だけであっても、その入れ物のことを「げたばこ」と呼び続けている。同様に、筆記具の入れ物を開けてみて筆が1本も入っていないくても「ふでばこ」と呼び続けている。つまり、実態の変化に言葉の変化が連動せず、従来のままで呼び続けているわけである。

柳田國男（1934）は、日本語の変化ならびに日本語に地域差が存在することの理由説明という文脈の中で、古語が複合語の構成要素として用い続けられることがあるこ

とを指摘する。たとえば衣服を意味する古語「キヌ」は、富山県では蛇のぬけがらの「ヘーブノキン」（蛇の衣服）として、また北陸一帯では衣服を入れておく一種の箱（衣櫃）の意味の「キンビツ・キンベツ」として残存していることを紹介する。古語が複合語の一部として残ることから、これを「複合保存」ないしは「複合保留」と呼んでいる。本稿で論じる「げた」や「ふで」は古語ではないが、基本的なメカニズムはこれと同様であることから、複合語として従来の語が保たれ（厳密に言えば複合語が従来の語のままということであるが）、意識化して見つめれば“古風な語”と感じられる「げたばこ」「ふでばこ」のような語の保存のことを「複合保存」と呼ぶことにする。

その一方で、事物は基本的に変わらないにもかかわらず呼び方を変える場合もある。たとえば、ズボンがずり落ちるのを防ぐために用いる革製や布製の帯のことを、基本的な機能や形態に変化がないにもかかわらず、かつての「バンド」から「ベルト」へと呼称が徐々に置き換えられている。同様に、袖なし上着のことをかつては「チョッキ」と呼んでいたが、今では「ベスト」という呼称に徐々に置き換えられている。つまり、言葉の方に変化があるのに、実態はそれに連動して変化しているわけではないという、上記と逆のケースである。この「バンド」から「ベルト」へ、「チョッキ」から「ベスト」への変化は半世紀ほど前からすでに進行していたらしく、大石初太郎（1979）は、外来語の中での新旧交替の比較的新しい例としてこれらを例示している。

柳田國男（1934）は新語について、「今まで経験もせず想っても見なかった事物が、新たに眼の前に出現すれば、いやが応も無く自然にでも国の語彙は増殖する」（表記は現代のものに改めた）と述べ、こうした事情で生まれた新語のことを簡潔に「新物新語」と呼ぶ一方、事物は以前からあるにもかかわらずそれを表わす言葉が新しくなったものを「旧物新語」と呼んでいる。「旧物新語」の「旧物」は、「今は無き古い物」という意味にも解されそうだが、ここでは「旧来（従来）から存在している物」という意味で解すべきである。そこで本稿では、「ベルト」や「ベスト」のような語のことを「旧物新語」と呼ぶことにする。

本稿では、「複合保存」の見られるケースとしての「げたばこ」と「ふでばこ」、旧物新語のケースとしての「ベルト」と「ベスト」について論じる。

もっとも現在では、入っている物は下駄ではなく靴なのだから、「げたばこ」と呼ぶのをやめて「くつばこ」と呼ぶという変化も見られるようである。同様に、入っている筆記具は筆ではなくシャープペンシル（シャープペン）やボールペン等であることから、「ふでばこ」から「ペンケース」等に置き換える変化も見られる。また、「バンド」も「ベルト」に、「チョッキ」も「ベスト」に置き換えられつつある。

そこで、現在の日本において、また筆者が暮らす岡山市において、これらの表現を用いる人がどの程度の割合いるのかを明らかにするためのアンケート調査を実施した。本稿はその分析結果の報告である。

2. 調査概要

本論で議論の根拠とするデータは次の調査により得たものである。いずれも筆者が調査の企画・実施にたずさわったものである。

(1) 全国での多人数調査 (2009 年実施、20 歳～79 歳の男女 803 人が回答)

(2) 岡山市での多人数調査 (2013 年実施、20 歳～79 歳の男女 81 人が回答)

(1) は国立国語研究所の調査研究の一環として実施したものである。^{注1} 当時研究所員であった筆者が主担当となり調査の企画・立案を行なった。実査は調査会社に委託した。無作為に選ばれた回答者に対し、調査票を用いての個別面接法により調査を行なった。なお、首都圏 (東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県) については、これと全く同じ調査をさらに 122 人に対し実施し、計 336 人から回答を得た。首都圏の状況についてより高い精度で見るときに参照するためである (後出のグラフでは「★首都圏 (336 人)」として示した)。調査の詳細については、本調査の最初の分析論文である尾崎喜光 (2015) で報告している。

(2) は筆者が本学において研究助成金を受けて実施したものである。^{注2} これも調査の企画・立案は筆者が行なった。実査は (1) と同様の方法により調査会社に委託した。フェイスシート項目を分析したところ、回答者のうち約 7 割は岡山県出身者であった。また、言語使用や言語意識を形成する上で重要な要因となると考えられる 15 歳までに最も長く住んだ場所も 8 割近くは岡山県であった。すなわち、出身地についても 15 歳までの最長居住地についても、岡山県を地理的背景とする回答者を 7～8 割含むデータであることが確認された。なお、調査サンプルの代表性はおおむね確保されていることや調査の詳細については、本調査の最初の分析論文である尾崎喜光 (2014) で報告している。

以下では、(1) を「全国調査」、(2) を「岡山市調査」と呼ぶ。

3. 分析

3.1. <げたばこ>……「複合保存」のケース 1

3.1.1. 設問

玄関にある外履きを入れる箱状のものを何と言うかについて、全国調査・岡山市調査ともに次の質問文と選択肢により回答を求めた。回答者が使っている表現は一つとは限らないことから、回答者が言うことがある表現をすべて選ばせた。なお、以下では、複数の表現を総称して示す場合は <げたばこ><ふでばこ>のように、従来の表現を <> でくくって示すこととする。

いろいろな言葉についてお伺いします。最初は物の名前です。

Q1. (1) 家の玄関には靴を入れるための箱がありますが、次の言い方のうち、自分で言うことがあるものをすべて選んでください。

(ア) げたばこ

(イ) くつばこ

(ウ) シューズボックス

3.1.2. 結果と考察

(1) 各表現の使用率の分析

全国調査の結果は図1のとおりであった。

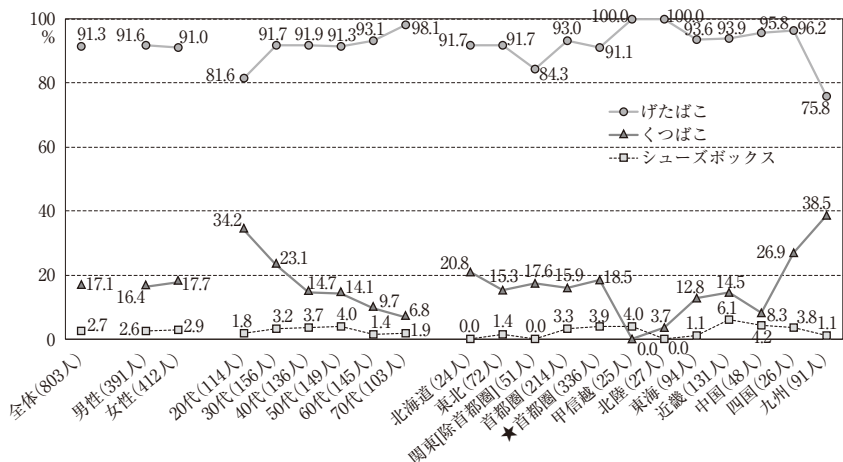


図1 <げたばこ>の各種表現の使用率率（全国調査）

グラフ左端の「全体」によると、現在でも約9割の人は「げたばこ」と呼んでおり、これと対立する「くつばこ」は2割程度にとどまっていることがわかる。外来語の「シューズボックス」を使う人の割合は非常に少ない。物自体は下駄から靴へと移り変わっても、表現は従来のまま堅固に保たれている典型的なケースと言えよう。

男女に分けて集計した結果によると、<げたばこ>については男女差はほとんど認められない。

一方、年齢差がある程度顕著に認められる。従来の「げたばこ」は若年層においても使用者率が高いものの、若年層に向けて微減傾向が認められる。特に30代から20代にかけての減少幅がやや大きく、20代の使用者率は8割にまで下がる。これに対し「くつばこ」の使用者率は若年層になるに従い一貫して上昇し、20代では3割を超える。こうした年齢差は、「げたばこ」から「くつばこ」への置き換えが現在進捗しつつあることを反映している可能性がおいに考えられる。なお、「げたばこ」が微減であるのに対し「くつばこ」の上昇がやや顕著であるということは、若年層を中心に両方を使う人が一定の割合いることを示唆している。この点については後に検討する。なお、外来語の「シューズボックス」については、若年層で増加するような傾向は特に認められない。インターネットで「シューズボックス」という語で検索すると、家庭用も含めかなりの数のウェブサイトがヒットするが、現在のところ業界用語にとどまっているためか、一般社会の中で定着するようなきざしはほとんど認められない。

地域別に見ると、「げたばこ」は九州で数値が低くなる他は、全国ほぼ一律である。

その九州では「くつばこ」が約4割と他の地域よりも高く、隣接する四国にもこの傾向がやや認められる。理由は現在のところ十分明らかなでないものの、九州を中心とした地域は、他の地域と比べ従来の「げたばこ」がやや弱く、逆に新しい「くつばこ」がやや強い地域である。

岡山市調査の結果は図2のとおりであった。

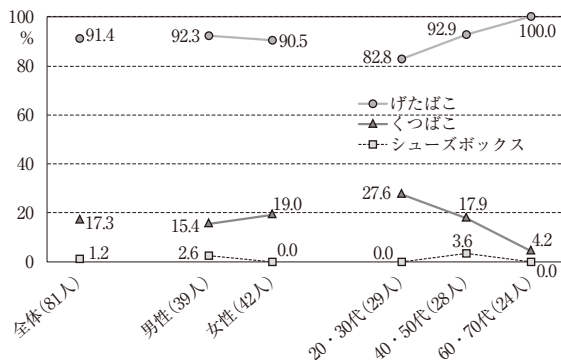


図2 <げたばこ>の各種表現の使用者率(岡山市調査)

左端の「全体」によると、先に見た全国状況とほぼ同様、約9割の人は現在でも「げたばこ」と呼んでいる。これに対立する「くつばこ」は、これも全国傾向とほぼ同様、2割程度にとどまる。外来語の「シューズボックス」を使う人の割合は岡山でも非常に少ない。全体的に、数値は全国平均値とほぼ同様である。

男女差はほとんど認められないが、年齢差がある程度顕著に認められる。全国傾向と同様、「げたばこ」は若年層になるに従いゆるやかに減少傾向が認められるのに対し、「くつばこ」には逆に上昇傾向が認められる。岡山市でも、「げたばこ」から「くつばこ」への置き換えが現在進行中であることが年齢差に反映されている可能性が考えられる。なお、外来語の「シューズボックス」は、岡山市においても若年層で増加するような傾向は認められない。

(2) 「げたばこ」と「くつばこ」の専用／併用の分析

今回の調査では、複数の表現を併用していることも十分考えられることから、回答者には使う表現を全て選択させる回答方法をとった。

そこで、代表的な表現でありかつ年齢層別分析によると異なる傾向を示す「げたばこ」と「くつばこ」について、両者を組み合わせた分析を行なった。

全国調査の結果は図3のとおりである。凡例で「併用」と示した併用者、すなわち2つの表現でゆれている人の割合に注目しつつおもな傾向を見て行こう。

グラフの「全体」によると、併用者は全体で約1割いることがわかる。複数の表現が並び行われているときは、確かに併用者が一定の割合いることが確認される。

男女による違いはほとんど認められない。

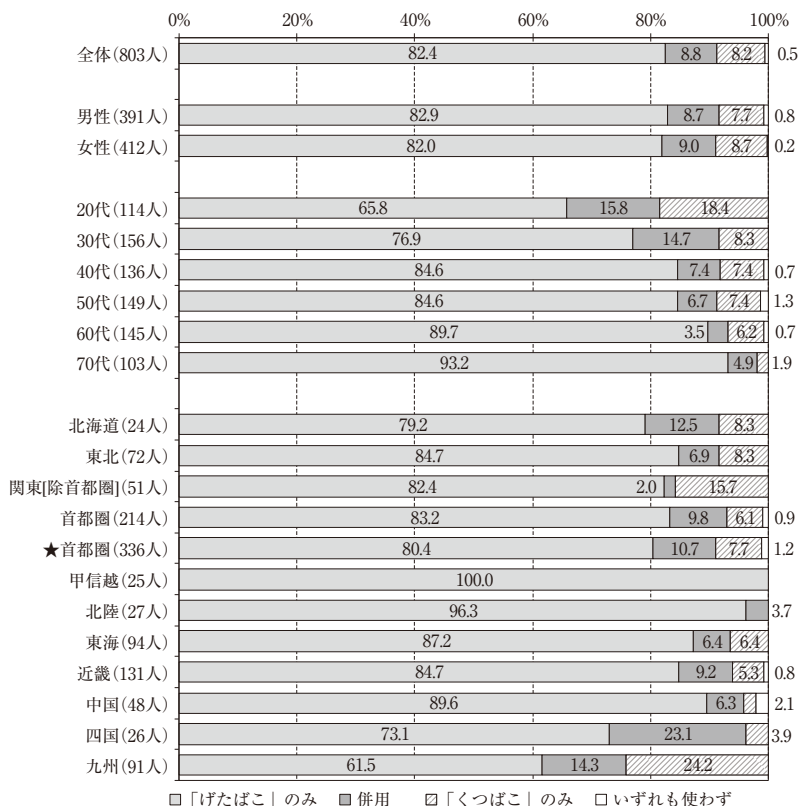


図3 「げたばこ」と「くつばこ」の専用／併用（全国調査）

年齢層別に見ると、若年層になるに従い併用者の割合が増加する傾向が認められる。その数値が最も高くなる20代は、図1によると、「げたばこ」が大きく減少し、逆に「くつばこ」が大きく増加する年齢層である。このように、変化が大きいと見られる年齢層では併用者の割合も大きくなり、逆に従来の「げたばこ」の使用者率が高いことから変化が小さいと見られる年齢層では併用者の割合も小さい。つまり、言葉のゆれが大きい年齢層においては、個人レベルにおいてもゆれ（＝併用）のある人の割合が高くなることがわかる。逆に言えば、併用者が多いということは、変化が著しく進行していることの現われと言えそうである。

地域別に見ると、図1において「くつばこ」の数値が高かった九州や四国では併用者の割合も相対的に高い。特に四国は、回答者が26人と少ないため数値が不安定である恐れもあるが、「くつばこ」を使う人の多くは併用としての使用である点が注目される。現在普及しつつあると考えられる「くつばこ」の使用は、まずは併用として始まることを示唆しているのかもしれない。

一方、岡山市調査の結果は図4のとおりであった。ここでも併用者の割合に注目しながらおもな傾向を見て行こう。

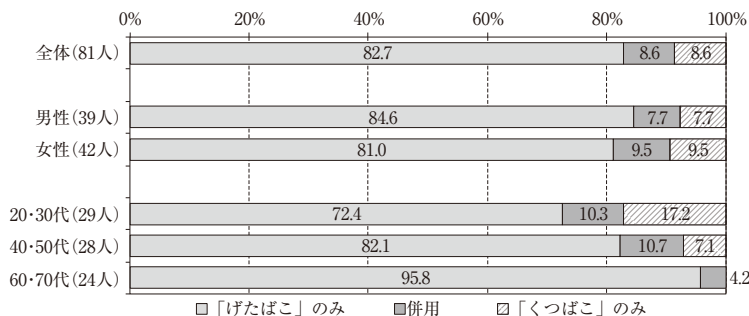


図4 「ふでばこ」と「くつばこ」の専用／併用（岡山市調査）

岡山市においても併用者が約1割いることが確認される。また、全国調査と同様、男女差はほとんど認められない。

年齢層別に見ると、60・70代から40・50代になると併用者の割合が増加する傾向が認められる。図2によると「くつばこ」の使用者率が一定程度見られる40・50代以下で、併用者の割合が多くなる。この傾向は全国の傾向と同様である。また、数値としては小さいが、60・70代での「くつばこ」の使用は併用としての使用のみである点も、変化が生じる際の進行のあり方として注目される。

3.2. <ふでばこ>……「複合保存」のケース2

3.2.1. 設問

筆記具を入れる物を何と言うかについては、全国調査・岡山市調査ともに次の質問文と選択肢により回答を求めた。

Q1. (2) 鉛筆や消しゴムなどを入れるための小さな入れ物がありますが、次の言い方のうち、自分で言うことがあるものをすべて選んでください。

- (ア) ふでばこ
- (イ) ふでいれ
- (ウ) えんぴつばこ
- (エ) えんぴついれ
- (オ) えんぴつケース
- (カ) ペンケース

3.2.2. 結果と考察

(1) 各表現の使用者率の分析

筆が入っていないのに「ふでばこ」と言うか否かが本設問の最大のポイントである。

「ふでいれ」もこれに該当する。

全国調査の結果は図5のとおりであった。

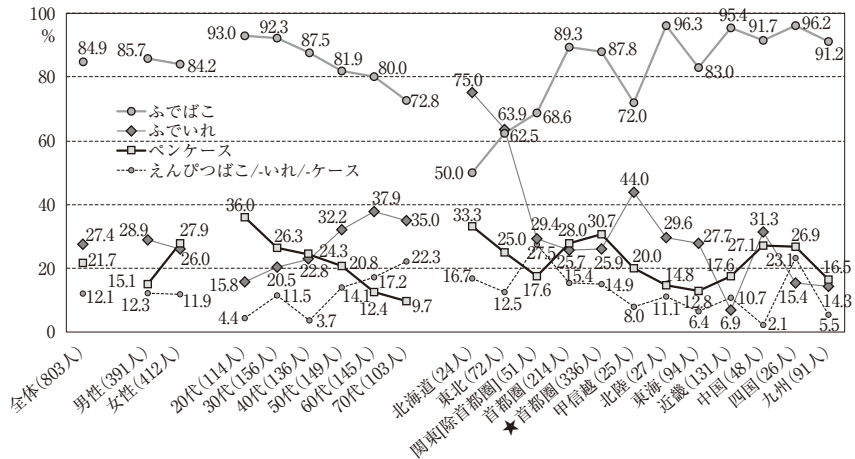


図5 <ふでばこ>の各種表現の使用率 (全国調査)

グラフ左端の「全体」によると、現在でも8割以上の人は「ふでばこ」と呼んでいることがわかる。数値も含めて基本的な状況は、先に見た「げたばこ」とほぼ同様である。「げたばこ」や「ふでばこ」は、現在でも「複合保存」の度合いが非常に強い表現である。いずれも日常的にはほぼ一語の意識で使われ、実態と異なる「げた」や「ふで」が複合語の構成要素として含まれていることが意識されにくいであろう。

もう一方の「ふでいれ」も、「ふでばこ」と同様の「複合保存」のケースであるが、こちらの使用者率は約3割にとどまる。「ふでいれ」よりも「ふでばこ」の方が一般的な呼称となっている。こうした「ふで」を含まず、実際に入っている可能性の高いシャープペンシル (シャープペン) や蛍光ペン、ボールペンの総称と言える「ペン」を含む「ペンケース」の使用者率もそれほど高くなく2割程度にとどまっている。この他、「えんぴつ」を前部要素に持つ「えんぴつばこ」「えんぴつ入れ」「えんぴつケース」は、合わせても1割程度に過ぎない。こうした状況から「ふでばこ」(や「ふでいれ」)も、物自体は移り変わっても表現は従来のまま堅固に残る「複合保存」の典型的なケースと言える。

男女別に見ると、外来語の「ペンケース」の使用者率が、男性よりも女性で高い点が注目される。「ペンケース」を使うのは主として女性である。

年齢差がある程度認められる。「ふでばこ」は若年層に向け緩やかな増加傾向を示す一方、「ふでいれ」はこれと逆の傾向を示す。その結果、「ふで」を前部要素とする「ふでばこ」と「ふでいれ」の合計使用者率は、数値が相殺され、どの年齢層も高い数値を維持している。「ふで」を含む複合語のバリエーション内において、「ふでいれ」から「ふでばこ」への置き換えが以前から生じており、現在はその最終局面にあることが、

2つの表現の年齢差と全体の数値に反映されている可能性が考えられる。一方、「ふで」を含まない「ペンケース」は若年層に向け増加傾向にある。この表現が現在普及しつつあることを反映している可能性が考えられる。これと逆に現在衰退しつつあると考えられるのが、「えんぴつ」を前部要素とする「えんぴつばこ / - いれ / - ケース」である。こうした異なる方向への変化傾向は、児童生徒が家庭や学校で用いている筆記具の変化と連動する面が少なくないと考えられる。

「ふでばこ」と「ふでいれ」について地域別に比較すると、北海道・東北を除きどの地域でも「ふでばこ」が優勢であるが、この北海道・東北を含め、西に行くほど「ふでばこ」がより優勢となり、逆に東に行くほど「ふでいれ」の数値が多少増加するという東西差が緩やかに認められる。このうち「ふでいれ」は、東北では「ふでばこ」と拮抗し、さらに北海道では「ふでばこ」よりも優勢となる。こうした地域差が何に起因しているのかは現在のところ十分明らかでない。入れ物の形状等の地域差との関連も含め、今後の課題である。一方、「ペンケース」と「えんぴつばこ / - いれ / - ケース」については、一貫した地域差の傾向は認めにくい。

岡山市調査の結果は図6のとおりである。

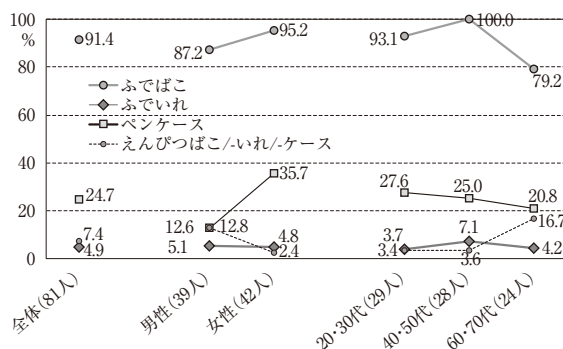


図6 <ふでばこ>の各種表現の使用者率 (岡山市調査)

左端の「全体」によると、先に見た全国の場合と同様、約9割の人は「ふでばこ」と呼んでいる。これと対立する「ふでいれ」は、先の全国調査で確認された東高西低の傾向にあることを反映してか数値は非常に低く、「ふで」を前部要素とする表現はほぼ「ふでばこ」のみという状況である。この「ふで」を含まない「ペンケース」は2割以上見られる。数値の傾向は全国と同様である。また、「えんぴつ」を前部要素とする「えんぴつばこ / - いれ / - ケース」の使用者率は低い。

男女別に見ると、「ペンケース」については男女差が著しく、全国での傾向と同様、使用者率は男性よりも女性で3倍近く高い。岡山市においても、使うとすれば主として女性である。

年齢層別に見ると、「ふでばこ」と「ペンケース」は若年層ほど数値が高くなる傾向が緩やかに認められる。一方、「えんぴつ」を前部要素とする「えんぴつばこ / - い

れ／ケース」は、使用者は主として60・70代であり、それよりも下の年齢層で使う人は極めて少ない。学校や家庭での筆記具として主として鉛筆を用いていた世代が用いる表現ということであろう。

(2) 「ふでばこ」と「ふでいれ」の専用／併用の分析

ともに「ふで」を前部要素として持つ「ふでばこ」と「ふでいれ」は、全国調査で一定以上の使用者率があり、年齢層別分析では「ふでいれ」から「ふでばこ」への置き換えも推測された。そこで、この2つを組み合わせた分析を行なった。全国調査の結果は図7のとおりである。

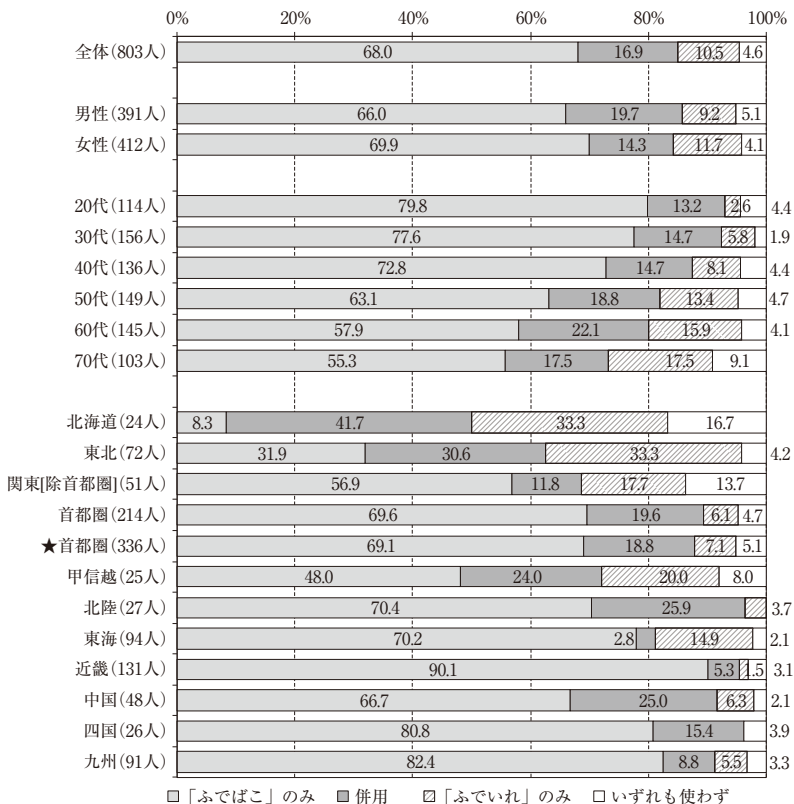


図7 「ふでばこ」と「ふでいれ」の専用／併用（全国調査）

ここでもおもに併用者の割合に注目しつつ傾向を見て行くと、その前にまず注目しておきたいのは、「いずれも使わず」が非常に少ないという点である。逆に言えば、「ふでばこ」か「ふでいれ」の少なくともいずれかは使うという人がほとんどであるということである。先に見た「げたばこ」以上に「複合保存」の度合いが著しいと言える。

さて、併用者の割合に注目してグラフを見ると、全体としては使用者が2割近くいることが確認される。これは「「ふでいれ」のみ」よりも高い数値である。「ふでいれ」を使う人は、「ふでいれ」のみを使うというよりも、「ふでばこ」と併用して使う人の方がむしろ多い。

男女別に見ると、男女による顕著な違いは特に認められない。

年齢層別に見ると、併用者が比較的多いのは50代以上である。この年齢層では「「ふでいれ」のみ」も比較的多い。「「ふでばこ」のみ」はどの年齢層でも多いのであるが、「「ふでいれ」のみ」もある程度多い年齢層においては、併用者の割合も多くなる。つまり、言葉のゆれが大きい年齢層においては、個人レベルにおいてもゆれ（＝併用）のある人の割合が高くなることがわかる。

岡山市の結果は図8のとおりである。

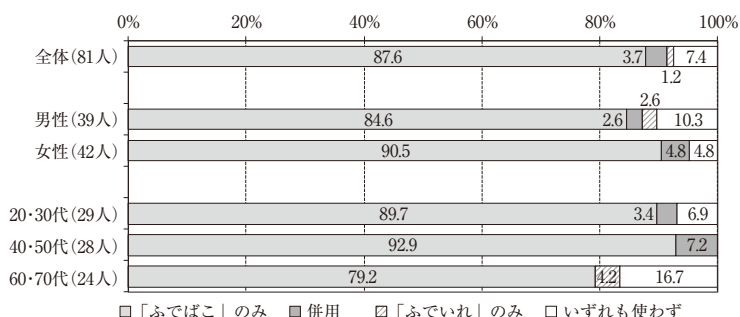


図8 「ふでばこ」と「ふでいれ」の専用／併用（岡山市調査）

「いずれも使わず」が岡山市でも非常に少ない点がまず注目される。全国状況とやや異なる点として、9割近くは「「ふでばこ」のみ」であり、併用者の割合が少ないことが注目される。この点は、男女別に見た場合も、年齢層別に見た場合もほぼ同様のことが言える。

3.3. <バンド>……「旧物新語」のケース1

3.3.1. 設問

ズボンがずり落ちないようにするための革製・布製の細めの帯のことを何と言うかについては、全国調査・岡山市調査ともに次の質問文と選択肢により回答を求めた。

Q1. (3) ズボンがずり落ちないようにするためのものですが、次の言い方のうち、自分で言うことができるものをすべて選んでください。

(ア) バンド

(イ) ベルト

3.3.2. 結果と考察

(1) 各表現の使用率の分析

併用も含め、従来からの表現である「バンド」を使うか、それとも新しい表現である「ベルト」を使うかがこの設問のポイントである。

全国調査の結果は図9のとおりであった。

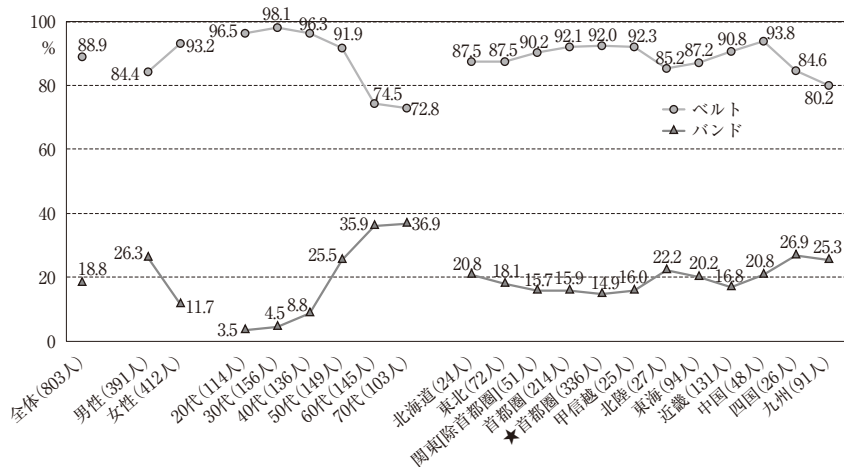


図9 <バンド>の各種表現の使用率率(全国調査)

グラフ左端の「全体」によると、「バンド」の使用率は2割程度にとどまっていることがわかる。これに対し「ベルト」の使用率は約9割にまで達する。現在では「バンド」は大きく縮小し、逆に「ベルト」がかなり一般化していることがわかる。

男女差が多少認められる。男女とも「ベルト」が非常に優勢であることに違いはないが、「ベルト」の使用率は男性に比べ女性が一層高い。これと逆の傾向を示すのが「バンド」である。女性は新しい「ベルト」により傾くのにに対し、男性は従来の「バンド」によりとどまる傾向が認められる。

年齢差が顕著に認められる。従来の「バンド」は、使用率が高い60代・70代でも4割弱にとどまるが、若年層になるに従い一貫して減少し、20代・30代での使用率はごくわずかになる。これと逆の傾向を示すのが新しい「ベルト」である。とりわけ40代以下での使用率は100%に近くなる。個人が若年層から中高年層になると「ベルト」を使うのをやめて「バンド」を使い始めるという可能性はあまりなさそうであることから考えると、こうした年齢差は「バンド」から「ベルト」への置き換えという言語変化が現在進行中であること、そして「全体」の数値を見ると現在はその最終段階に近いことを示している可能性が高いと考えられる。

地域差はほとんど認められない。どの地域も「ベルト」は8～9割、「バンド」は2割前後である。「バンド」から「ベルト」への置き換えは全国一律に生じている。ただし、九州では新しい「ベルト」の使用率が他の地域よりもやや低い。

この「バンド」から「ベルト」への置き換えについては木下哲生（2002）の調査研究がある。「洋装で腰につける帯」の意味での「バンド」と「ベルト」について各種国語辞典等の見出し語と意味記述を調査したところ、「バンド」は明治時代後半から載っているのに対し、「ベルト」は大正時代から載るようになったとする。また、小説等の文芸作品における用例を調査したところ、もともと「バンド」の方が優勢であったものが、1957（昭和 32）年ごろから「バンド」と「ベルト」の両方が同じくらいの頻度で用いられるようになり、1962（昭和 37）年以降は「ベルト」の方が優勢になったとする。そして、こうした新古の違いが認められる原因については、「バンド」が使われ始めたのが明治初年であるらしいことから、「バンド」が用いられたのは江戸時代の蘭学の影響（オランダ語で「帯」は「band」）を指摘する。しかしその後「ベルト」が優勢になったのは、学校教育などを通して英語の正しい知識が普及したこと（英語で「帯」は「belt」）をその原因として指摘する。

今回の全国調査では、「ベルト」の使用者率は約 9 割と非常に高かったが、小説等では今から半世紀以上前にすでに「ベルト」の方が優勢であったことから考えると、日本人の日常の話し言葉においても、当時すでにそれに近い状況にあったためではないかと考えられる。その後さらに普及が進行し、現在はその最終段階に近いものと考えられる。

岡山市調査の結果は図 10 のとおりであった。

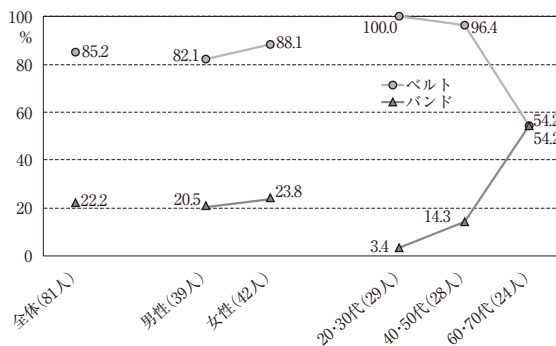


図 10 <バンド>の各種表現の使用者率（岡山市調査）

「全体」によると、従来からの「バンド」の使用者率は 2 割程度にとどまるのに対し、新しい「ベルト」は 8 割を超す。これらの数値は全国の傾向とほぼ同様である。岡山市でも、現在では「バンド」が大きく縮小し、逆に「ベルト」がかなり一般化している。男女差については、回答者がそれほど多くないこともあり明確な違いは認めがたい。

これに対し年齢差が顕著に認められる。60・70 代では従来の「バンド」を使用する人が 5 割程度いる一方、40・50 代になるとその使用者率は激減し、さらに 20・30 代になるとほとんどいなくなる。これと逆の傾向を示すのが「ベルト」である。特に 40・50 代以下での「ベルト」の使用者率はほぼ 100% に達する。「バンド」から「ベルト」へ

の置き換えが、現在岡山市でも急速に進行中であることを示しているものと考えられる。

(2) 「バンド」と「ベルト」の専用／併用の分析

全国調査の結果は図 11 のとおりである。

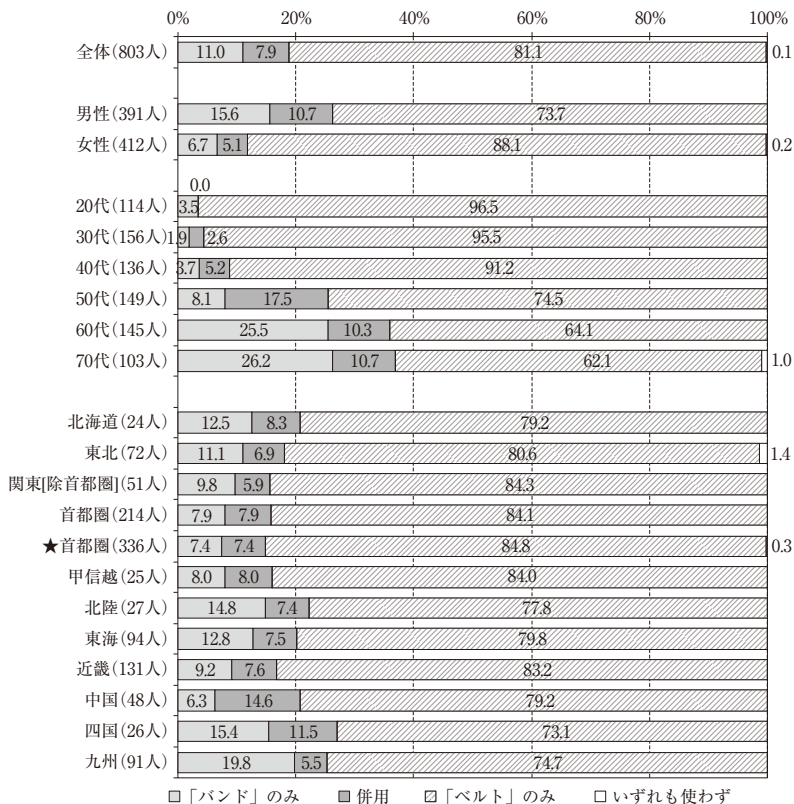


図 11 「バンド」と「ベルト」の専用／併用（全国調査）

併用者の割合に注目しつつグラフを見ると、全体としては1割近くいることが確認される。

男女別に見ると、図9によると「バンド」の数値が女性よりも相対的に高い男性において、併用者の割合も相対的に高い。

年齢層別に見て併用者が比較的多いのは50代以上である。図9によると、この年齢層では「バンド」の数値も相対的に高い。特に「バンド」から「ベルト」への急激な移行世代であると考えられる50代では併用者がとりわけ多く2割近くもいる。「ベルト」に加え「バンド」を使う人も一定の割合いるような言葉のゆれが相対的に大きい年齢層においては、個人レベルにおいてもゆれ（＝併用）のある人の割合が高いこ

とがわかる。

地域差については特に顕著な傾向は認められないが、「ベルト」の使用者率が他の地域よりもやや低い九州では、「バンド」のみがやや高めとなる。数値としては2割にとどまるが、専用という形で「バンド」を使う傾向が他の地域よりもやや強いのが九州である。

岡山市の結果は図12のとおりである。

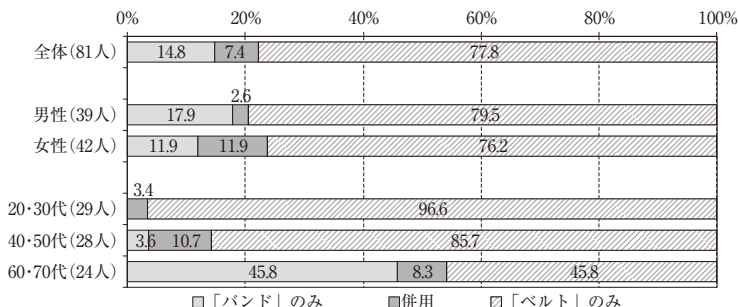


図12 「バンド」と「ベルト」の専用／併用（岡山市調査）

ここでも併用者の割合に注目してグラフを見ると、全体としては1割近くいる。全国の傾向とはほぼ同様である。

男女別に見ると、全国の傾向とやや異なり、女性において併用者の割合は男性よりも高い。女性は、「バンド」を使うにしても、「ベルト」と併用という形で使う傾向にある。

年齢層別に見ると、併用者が比較的多いのは40・50代と60・70代であり、ともに約1割いる。ただし、40・50代は「ベルト」のみが非常に優勢であり、この点は20・30代とほぼ同様である。これに対し60・70代は「バンド」のみないしは「ベルト」のみが拮抗する状況である。60・70代は言葉のゆれが非常に大きい年齢層であるが、個人レベルにおいてのゆれ（＝併用）のある人の割合はそれほど高くない。これまでに見たグラフと傾向が異なるが、このようなケースもある。

3.4. <チョッキ>……「旧物新語」のケース2

3.4.1. 設問

服の内側に着る袖の無い上着のことを何と言うかについては、全国調査・岡山市調査ともに次の質問文と選択肢により回答を求めた。

Q1. (4) 服の内側に着るそでのない上着ですが、次の言い方のうち、自分で言うことがあるものをすべて選んでください。

- (ア) チョッキ
- (イ) ベスト

3.4.2. 結果と考察

(1) 各表現の使用者率の分析

併用も含め、従来からの表現である「チョッキ」を使うか、それとも新しい表現である「ベスト」を使うかがこの設問のポイントである。

全国調査の結果は図 13 のとおりであった。

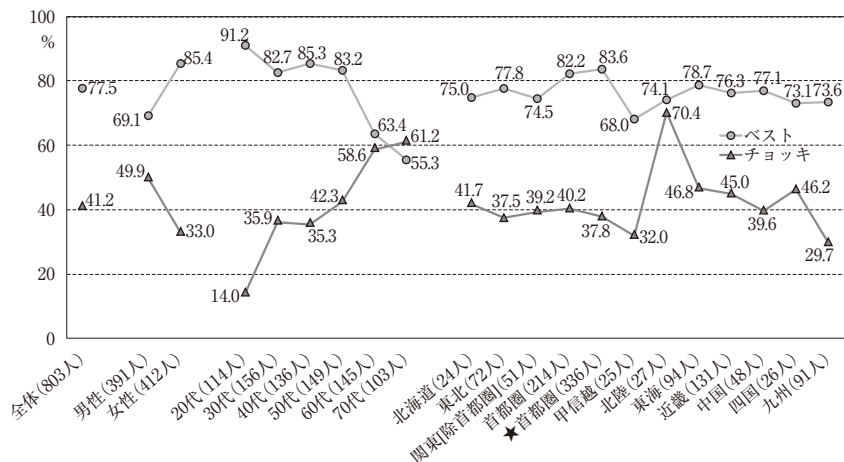


図 13 <チョッキ>の各種表現の使用者率 (全国調査)

「全体」によると、従来からの表現である「チョッキ」の使用者率は4割程度にとどまっていることがわかる。現在すでに少数派となつてはいるものの、先に見た「バンド」よりは保持されている。これに対し「ベスト」は使用者率が約8割にまで達する。現在では「ベスト」の方が優勢であることがわかる。

男女差が認められる。男女とも「ベスト」の方が優勢であるが、「ベスト」の使用者率は男性に比べ女性で一層高い。これと逆の傾向を示すのが「チョッキ」である。女性は新しい「ベスト」により傾くのに対し、男性は従来の「チョッキ」により傾く。これは、先に見た「ベルト」か「バンド」かの傾向と同様である。相対的な傾向にとどまるが、置き換えという言葉の変化が生じている場合、女性はより革新的、男性はより保守的という傾向が認められる。

年齢差が顕著に認められる。60代と70代では従来の「チョッキ」と新しい「ベスト」の使用者率が拮抗しているが(70代ではむしろ「チョッキ」が優勢)、若年層になるに従い「チョッキ」はほぼ一貫して減少し、逆に「ベスト」が増加する。その結果20代での開きが著しくなり、「ベスト」は約9割にまで達するのに対し、「チョッキ」は1割強にまで縮小する。個人が若年層から中高年層になると「ベスト」を使うのをやめて「チョッキ」を使い始めるという可能性はあまりなさそうであることから考えると、こうした年齢差は「チョッキ」から「ベスト」への置き換えが現在進行中であること、そして「全体」の数値を見ると、現在は両表現のゆれの状態から「ベス

ト」の定着の段階に入りつつあることを示している可能性が高い。

地域差については顕著な傾向は認められない。北陸の「チョッキ」の数値が他よりも著しく高いが、回答者が27人と少数であることを考えると、安定した数値ではない可能性が考えられる。これを除けば、どの地域も「ベスト」は7～8割、「チョッキ」は3～4割である。先に見た「バンド」と「ベルト」と同様、「チョッキ」から「ベスト」への置き換えもほぼ全国一律に生じている。

岡山市調査の結果は図14のとおりであった。

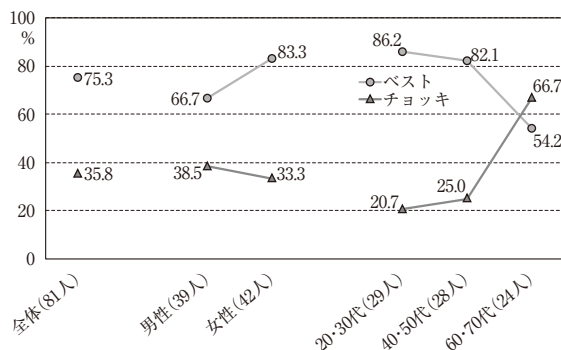


図14 <チョッキ>の各種表現の使用率（岡山市調査）

「全体」によると、従来からの「チョッキ」の使用率は3～4割程度にとどまるのに対し、新しい「ベスト」は7～8割に達する。全国の傾向とはほぼ同様である。岡山市でも、現在では「チョッキ」は縮小し、逆に「ベスト」が一般化しつつある。

男女差については、新しい「ベスト」は男女とも優勢であるが、女性は男性以上に「ベスト」に傾く。

年齢差が顕著に認められる。60・70代では従来の「チョッキ」の方がむしろ優勢であり7割近くが使っているが、40・50代になると「チョッキ」の使用率は激減し、その状況は20・30代にも続く。これと逆の傾向を示すのが「ベルト」である。40・50代以下での使用率は8割に達する。「チョッキ」から「ベスト」への置き換えが、岡山市でも現在急速に進行中であることを示している可能性が高い。

(2) 「チョッキ」と「ベスト」の専用／併用の分析

全国調査の結果は図15のとおりである。

併用者の割合に注目しつつグラフを見ると、全体として併用者は約2割いることが確認される。「バンド」「ベルト」の1割近い状況と比べると大きな数値である。絶対的な数値としては依然少数ではあるものの、図13によると従来の「チョッキ」の使用者が約4割おり「ベスト」との拮抗状態が相対的に高いこと、すなわち言葉のゆれが現在も一定程度あることが、個人レベルにおけるゆれ（＝併用）の割合を高くしているものと考えられる。

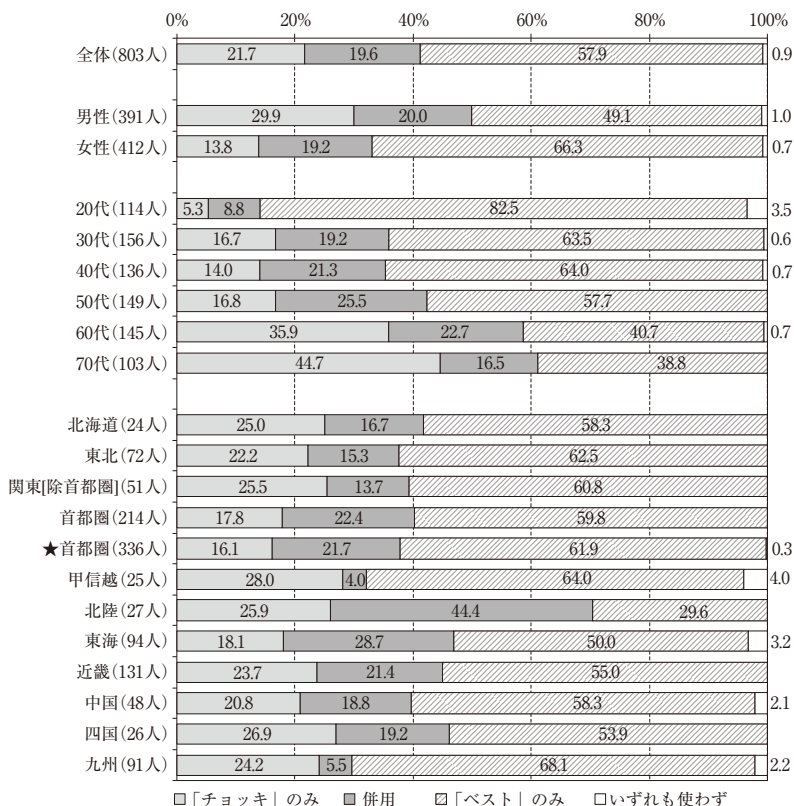


図 15 「チョッキ」と「ベスト」の専用／併用（全国調査）

男女別に見ると、併用者の割合については特に男女差は見られないが、「「チョッキ」のみ」が男性に、逆に「「ベスト」のみ」が女性にそれぞれ傾くという違いが顕著に認められる。

年齢層別に見て併用者が比較的多いのは、50代を中心とするその前後の年齢層である。図 13 によると、50代は「チョッキ」から「ベスト」への置き換えが著しい年齢層である。言葉の置き換えという変化に伴う言葉のゆれが大きい年齢層では、先に見た「バンド」「ベルト」と同様、個人レベルにおいてもゆれ（＝併用）のある人の割合が高い。

地域差については、回答者が少ない北陸や甲信越で他と異なる傾向が認められるが、それ以外では「併用」はおおむね 2 割前後であり、顕著な地域差は特に認められない。ただし、回答者が少なくない東海で併用者が約 3 割と多めである点や、九州では逆に併用者が 1 割に満たず専用という形で「ベスト」を使う人が約 7 割と他の地域よりも多い点が注目される。ただしその原因は、現在のところ十分明らかでない。

岡山市の結果は図 16 のとおりである。

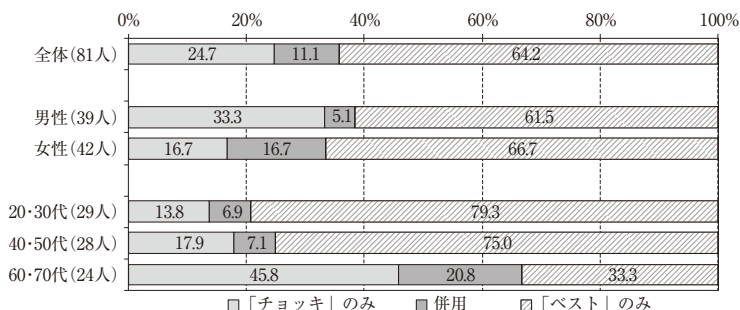


図 16 「チョッキ」と「ベスト」の専用／併用（岡山市調査）

併用者の割合に注目してグラフを見ると、全体としては1割近くあり、全国の傾向よりは少なめである。

男女別に見ると、全国の傾向とやや異なり、女性において併用者の割合が男性よりも高く、先に見た「バンド」か「ベルト」かとよく似た傾向が認められる。女性の場合、「チョッキ」を使うにしても「ベスト」と併用という形での使用という傾向にある。

年齢層別に見ると、併用者が比較的多いのは60・70代であり2割いる。この年齢層は「「チョッキ」のみ」もほぼ半数と多い。一方「「ベスト」のみ」も約3割はおり、全体として両者が拮抗する。言葉のゆれが大きい年齢層であり、それが個人レベルにおいてのゆれ（＝併用）としても相対的に大きく現れているものと考えられる。

4. まとめと今後の課題

本研究で得られたおもな知見をまとめると次のようになる。

「複合保存」のケースとしてくげたばこ>とくふでばこ>を調査したところ、次のことが明らかになった。

①くげたばこ>

全国調査によると現在でも約9割は「げたばこ」と呼んでおり、これと対立する「くつばこ」は2割程度にとどまる。物自体は下駄から靴へと移り変わっても、表現は従来のまま堅固に保たれている典型的なケースである。なお、外来語の「シューズボックス」を使う人は非常に少ない。

年齢層別に見ると、「げたばこ」は若年層に向け微減傾向にあるのに対し、「くつばこ」は逆に上昇する。「げたばこ」から「くつばこ」への置き換えが現在進行しつつあることを反映している可能性が考えられる。

「げたばこ」と「くつばこ」の併用者が約1割いる。変化が大きい20代では併用者の割合も大きい。このことから、言葉のゆれが大きい年齢層では個人レベルにおいてもゆれ（＝併用）のある人の割合が高いと言える。

なお、岡山市もこれとほぼ同様の状況であった。

②<ふでばこ>

全国調査によると現在でも8割以上は「ふでばこ」と呼んでいる。「げたばこ」も「ふでばこ」も「複合保存」の度合いが非常に強い表現である。「ふでいれ」も「複合保存」のケースであるが、使用者率は約3割にとどまる。また、「ペンケース」は2割程度、「えんぴつばこ / いれ / ケース」は1割程度にとどまる。このうち「ペンケース」は、男性よりも女性で使用者率が高い傾向が認められる。

年齢層別に見ると、「ふでばこ」は若年層に向け緩やかな増加傾向を示すのに対し、「ふでいれ」はこれと逆の傾向を示す。「ふで」を含む複合語のバリエーション内において、「ふでいれ」から「ふでばこ」への置き換えが以前から生じており、現在はその最終局面にあることが推測される。「ペンケース」も若年層に向け増加傾向が認められ、現在普及しつつあるものと推測される。一方、「えんぴつばこ / いれ / ケース」は衰退しつつあると推測される。こうした異なる方向への変化傾向は、児童生徒が家庭や学校で用いている筆記具の変化と連動する面が少なくないと考えられる。

地域別に見ると、西日本ほど「ふでばこ」がより優勢となり、逆に東日本ほど「ふでいれ」の数値が多少増加するという東西差が緩やかに認められる。

「ふでばこ」と「ふでいれ」の併用者が2割近くいる。併用者が比較的多いのは50代以上である。言葉のゆれが大きいこの年齢層においては、個人レベルにおいてもゆれ（＝併用）のある人の割合が高い。

岡山市では「ふでばこ」の使用者率が約9割にまで上り、全国調査よりもさらに高い。「ペンケース」は全国調査と同様に2割以上見られる一方、「えんぴつばこ / いれ / ケース」の使用者率は低い。このうち「ペンケース」については男女差が著しく、使うとすれば主として女性である。

一方、「旧物新語」のケースとして<バンド>と<チョッキ>を調査したところ、次のことが明らかになった。

③<バンド>

全国調査によると、「バンド」の使用者率は2割程度にとどまるのに対し、「ベルト」は約9割にまで達する。現在では「バンド」は大きく縮小し、逆に「ベルト」がかなり一般化している。

男女別に見ると、いずれも「ベルト」が優勢であるが、女性は新しい「ベルト」により傾くのに対し、男性は従来の「バンド」によりとどまる傾向が認められる。

年齢層別に見ると、「バンド」は若年層になるに従い使用者率が一貫して減少するのに対し、「ベルト」はこれと逆の傾向を示す。「バンド」から「ベルト」への置き換えが進行中であり、現在はその最終段階に近いことを示していると考えられる。

「バンド」と「ベルト」の併用者が1割近くいる。併用者が多いのは、「バンド」から「ベルト」への急激な移行世代である50代である。言葉のゆれが相対的に大きい年齢層においては個人レベルにおいてもゆれ（＝併用）のある人の割合が高い。

岡山市でも全国調査とほぼ同様の傾向が認められ、現在では「バンド」が大きく縮小し、逆に「ベルト」がかなり一般化している。「バンド」から「ベルト」への置き

換えは岡山市でも急速に進行中であると考えられる。

④<チョッキ>

全国調査によると、「チョッキ」の使用者率は4割程度にとどまるのに対し、「ベスト」は約8割にまで達する。現在では「ベスト」が優勢である。

男女別に見ると、いずれも「ベスト」が優勢であるが、その使用者率は男性に比べ女性で一層高いのに対し、「チョッキ」はこれと逆の傾向を示す。相対的な傾向ではあるが、先に見た「ベルト」か「バンド」かも含め、言葉に置き換えが生じている場合、女性はより革新的、男性はより保守的という傾向が認められる。

年齢層別に見ると、若年層になるに従い「チョッキ」はほぼ一貫して減少し、逆に「ベスト」が増加する。「チョッキ」から「ベスト」への置き換えが進行中であり、現在は両表現のゆれの状態から「ベスト」の定着の段階に入りつつあることを示していると考えられる。

「チョッキ」と「ベスト」の併用者が約2割いる。従来の「チョッキ」の使用者が少数とはいえ約4割はおり、「ベスト」との拮抗状態が相対的に高いこと、すなわち言葉のゆれが現在も一定程度あることが、個人レベルにおけるゆれ（＝併用）の割合を高めているものと考えられる。

年齢層別に見て併用者が比較的多いのは、「チョッキ」から「ベスト」への置き換えが著しい50代を中心とする年齢層である。言葉のゆれが大きい年齢層においては個人レベルにおいてもゆれ（＝併用）のある人の割合が高い。

岡山市でも全国調査とほぼ同様の傾向が認められ、現在では「チョッキ」は縮小し、「ベスト」が一般化しつつある。

男女別に見ると、女性は男性以上に「ベスト」に傾く。

年齢差が顕著に認められ、60・70代では従来の「チョッキ」の方がむしろ優勢であるが、若年層に向けて激減する。これと逆の傾向を示すのが「ベスト」である。「チョッキ」から「ベスト」への置き換えが現在急速に進行中であると考えられる。

こうした変化はまだ当面続くものと考えられる。本稿では年齢差から変化傾向を推測したが、2009年実施の全国調査から10年が経過しようとしていることを考えると、近い将来同様の調査を繰り返すことで、実際の時間の経過に伴う変化の在り方をとらえることも可能となる。そうした追跡調査により、言語変化をより確実にとらえることもまた重要である。

注1 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門言語生活グループの研究プロジェクト「国民の言語行動・言語意識・言語能力に関する調査研究（日本語の地理的多様性に関する多角的調査研究）」（2006年度～2009年度前期）の一環として、研究課題「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」により実施されたものである。

注2 2013年度学内研究助成金（研究課題「岡山市における方言使用・方言意識の現状と動態に関する調査研究」）により行なったものである。

参考文献

- 大石初太郎（1979）「古い語、新しい語」『国語展望』51
- 尾崎喜光（2014）「岡山における連母音の融合状況(2)－「岡山市民調査」から見る－」『清心語文』16
- （2015）「全国多人数調査から見るガ行鼻音の現状と動態」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』39-1
- 木下哲生（2002）「「バンド」と「ベルト」の意味の重なり－《洋装で腰につける帯》の場合－」『日本近代語研究』3（ひつじ書房）
- 柳田國男（1934）『國語科學講座 VII 國語方言學 新語論』（明治書院）

（おざき よしみつ／本学教授）

キーワード＝「げたばこ」、「ふでばこ」、「バンド」、「ベルト」